

かな文字を読む 解説

1 小室家資料の文書群について

小室家：比企郡番匠村(現ときがわ町番匠)は、比企郡西部、村の北を東流する都幾川によってできた谷の末端に位置する。小室家は初代田代元貞の時代、享保10年(1725)から、番匠村に居住し、村の医者として代々活躍した。三代小室元長の代(1764年以降)に、姓を小室に改めた。三代元長は、俳諧の世界でも芭蕉門下の加舎白雄を初代とする春秋庵系の俳人としてその名を残している。元長(俳号如達)は春秋庵三代の川村碩布に師事、同門として子の元貞(俳号為一)や孫の元長(俳号笠山・誠廬)、安藤文沢(俳号称々)がいる。

小室家文書：昭和52年(1977)年に当館に寄託収蔵され、平成27年(2015)3月に当館に寄贈された。総点数7622点。内訳は、近世・近代文書、書状、典籍、書画、錦絵・刷物。典籍・書状が多いことに特徴がある。小室家歴代が医者としてのみならず、知識人・文化人として、俳諧・漢詩・郷土研究等他分野にわたって活躍、交流を持っていたことがうかがわれ、文化史関係における一級資料群ともいえる。

(『収蔵文書目録第36集 小室家文書目録』埼玉県立文書館 平成9年9～21頁 より)

2 小室元長(五代目)の熱海訪問を記した資料「熱海遊簿」について

明治七年(一八七四)五月～六月 熱海遊簿 【小室家文書271-1】

縦24cm×横17.1cm 表紙共全58丁 墨付56丁

明治7年に伊豆方面に旅をしたときの記録。後日書き加えられたと思われる朱書きや張り紙があることなどからして、最終的に明治13年頃にまとめられた資料だと考えられている。熱海への旅は、同じく熱海への旅を記した「熱海再遊簿」の明治九年六月一日条にある記事から熱海の富士屋を定宿として、元長自身のリュウマチ治療が主な目的だという事がわかる。そのほかに、多くの名所・旧跡をめぐり、貴重な骨董書画・古文書を閲覧し記録をとっていることからみて、元長が晩年精力的に進めていた歴史研究のための史料調査も目的の一つであったようだ。

明治七年五月二十二日から六月二十五日までのおよそ一か月をかけた、元長五十三才の時の、初めて伊豆方面への旅の記録である。五月二十二日元長は番匠村を出発し、八王子八幡宿を経て相原(現東京都町田市)・橋本(現神奈川県相模原市)と南下し、二十四日厚木駅に投宿。厚木では官立小学校成思館を訪問している。

(『埼玉県史料叢書24 小室家文書 三 五代小室元長日記』埼玉県 令和4年40pより)

3 小室元長(五代目)の俳人としての活動と「鳴立庵」について

俳人としての(五代目)小室元長(俳号笠山・誠廬)：前述の通り、三代元長以来、小室家は俳諧の世界でも、芭蕉門下の加舎白雄を初代とする春秋庵系の俳人としてその名を残している。春秋庵の川村碩布に師事し、祖父の三代元長(俳号如達)、父の元貞(俳号為一)と共に、俳号笠山・誠廬として活躍。久米逸淵の弟子で、富処西馬とは交友が厚く、西馬の嘉永2年

(1849)『鳳朗発句集』刊行に関しては、父為一(元貞)とともに資金援助を行っている。

(『収蔵文書目録第36集 小室家文書目録』埼玉県立文書館 平成9年 9~21頁 より)

「**鳴立庵**」: 寛文の初め(1660年)頃に建てられた庵。元禄八年(1695)に大淀三千風が庵主としてはいってから、俳諧道場となる。鳴立庵の名称は12世紀の歌人西行が「心なき身にも哀はしられけり鳴立沢の秋の夕暮」と詠んだ地であったという伝承に由来している。北面の武士という身分を捨てて出家し、権力に結びつかず、諸国を行脚して数多くの秀歌を残した西行のイメージを三千風はうまく利用して、後には日本三大俳諧道場と呼ばれる鳴立庵を印象づけた。

三千風の後も、鳥酔、白雄、葛三と有名な俳諧師が庵主となり今日まで続いている。

小室元長(五代目)の所属する春秋庵の初代加舎白雄は、鳴立庵の三代目庵主でもある。

また小室元長(五代目)と同時代に十一代庵主であった大沢寿道は、武蔵国大里郡明戸村(現深谷市)出身で、明治五年から庵主となっている。幕末の動乱期には庵主不在の時期があり、明治に入ってから初めて庵主となった寿道は、荒廃していた庵を修復している。また、明治6年(1873)「鳴立庵改修寄進帳」には寿道と同郷の渋沢栄一、尾高惇忠の名がみえる。

(『鳴立庵』大磯町郷土資料館 令和元年(2019) より)

4 出典解説 一部

・西行の歌

362 心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮れ 西行法師

(ものあわれを解しないこの身にもあわれさはわかるよ、鳴が飛び立つ沢辺の秋の夕暮れの)

(久保田淳訳注『新古今和歌集 上』角川書店 平成19年)

東の方へまかりけるに、よみ侍りける 西行法師

987 年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山

(年老いて再び越えることができると思っただろうか、思いはしなかった。命があったからなのだ。

小夜の中山よ。)

東の方へ修行し侍りけるに、富士の煙をよめる 西行法師

1615 風になびく富士の煙の空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな

(風になびく富士の煙が空に消えていくが、ちょうどどのように、どうなっていくかも分からない、わたしの思いの火であることよ。)

(峯村文人訳注『新編日本古典文学全集 新古今和歌集』小学館 平成7年)

・西住笠懸けの松 (概要)

岡部北口を過ぎて宇津ノ谷峠に向う途中の河原町・岩鼻山の上の松についての伝承。

西行が弟子の西住と一緒に旅をしており、舟に乗っているところ同船した武士と言い争いになり、修行の身であるにもかかわらず西住が口論を起こした。西行は西住に説教をして、和歌を書き付けた笠を渡して別れた。その後、西住は西行を追い、松のところまでくるが力尽きてしまう。その際に、笠に歌を書きつけて、この松に掛けたという。

西へ行く雨夜の月やあみだ笠 影を岡部の松に残して

後日、西行は上記の経緯を知り、歌を詠み西住の死を悲しんだ。

笠ありてみのいかにしてなかるらん あわれはかなき天が下とは
もろともに眺め眺めて秋の月 ひとりにならんことぞ悲しき

(藤枝市 HP 2023年8月18日 閲覧
<https://www.city.fujieda.shizuoka.jp/kyodomuse/11/12/1445916539053.html>)

5 鳴立沢の碑について

小室元長(五代目)が書き写した石碑は現存する。以下に大磯町教育委員会による石碑表面の翻字を載せる。元長の写し取った内容と用字や表現に多少異動が出ている。意味の変わる異動については太字にして記した。

こゝろなき 身にも哀れハ しられけり 鳴たつ澤の 秋の夕暮 と読しハ 鳥羽の院 北面
の武士 のりきよの かしらおろして つみの身の 西へ行名の しるしにや 佛道哥道 い
みしくて 見ぬ世の旅の 門出の 命なりけり 佐夜の山 うつの山邊の うつゝなき 風に
なひきし 富士の根の 煙とならん 身のひまを あくる箱根や こよろきの いそけとつく
る 友ちとり ともねの鳴の 澤水の めいほくなれや 新古今 三の夕の 名ところを した
ふや時の 和哥所 飛鳥井雅章 駕を立て 折しも春の あはれさハ 秋ならねとも しられ
けり 鳴立澤の 證哥ゆへ 我も行脚の 笠かけ松 月よりほかは とふ人も 嵐のよする 高
すなこ かきならしつゝ 此澤の あるしをねかふ さちありて 其名高雄の 文学のなた作
りてふ ミゑい堂 和哥三神や 虎心堂 猶五智尊を 開基せし 宗雪居士の はか所 我身も
こゝに 夜臺して 謡につくり あるハ又 田鳥集に 國への 詩歌連俳 あつめつゝ 五百
年忌の たむけまで 満願せしを 我国の いせのいさわの 友つ人 施入をなして たのも
しや 心なき身の 西へ行 道しるへにと たてしいしふミ 東往居士三千風誌之
元禄十三曆辰二月望日

(大磯町教育委員会『大磯町文化財調査報告書29集 石造物調査報告書(2)～鳴立庵～』昭和63年)

6 史料の構成と概要

構成

番匠村(現ときがわ町)の医者及び俳人の小室元長(五代)が、熱海に湯治へ行く際の日記。

- 1 明治7年5月25日に厚木を出発。平塚新田八幡神社に立ち寄り、諸村を通過。
- 2 大磯で「延台寺」に立ち寄り、「角半」で昼食をとる。
- 3 「鳴立庵」に大沢寿道を訪ね、加舎白雄の句碑をたずねる。
- 4 大淀三千風の石碑を書き写す。
- 5 「鳴立庵」につたわる品を見た後出発。
- 6 前川、酒匂川を経て、四時に小田原駅に宿泊。
- 7 家族、知人に手紙をだす。

概要

(明治7年5月)25日 壬午 月曜

厚木(現)を出立。一里(約3.9キロ)ばかり東海道を西に向かう間に霧雨が降りはじめた。蝙蝠傘から落ちる雫に衣服を湿らせて、一里(約3.9キロ)ばかり進むと、快晴となった。田村・八幡・四ノ宮の村々を通り過ぎて、平塚新田八幡の神社を参拝する。その神社の石灯籠には寛文年間の銘がある。陶綾郡大磯駅の宮経山延台寺(日蓮宗)で「虎が石」を拝見する。見物料は弍銭。角半で昼食をとる。

鳴立庵の大沢寿道を訪ねて、白雄居士の秋風の句碑の前に燕子花を折って供える。
(入って)正面に西行堂がある。その側に東往舎(大淀)三千風翁が西行上人の没後 500 年忌を
弔う長歌が存在する。

【長歌の概要】(心なき身にも哀れは～)

「風情を解せない私にもこの場所のよさが感じられたのだった、鳴たつ沢の秋の夕暮
れ景色よ」とお詠みになったのは、鳥羽上皇の北面の武士であった佐藤義清が出家をし
て生涯西方浄土へ行く名を名乗った西行であろうか、そうにちがいない。

(西行の旅は)仏道歌道の修行を激しく行って、来世への旅の門出の命なのだった。東海
道の難所である佐夜の中山や宇津の山を越える峠道はこの世のものではない様子で、
風になびく富士山の煙となるだろう出家の身(西行)が(詠んだ)、夜が明ける箱根や小余
綾の磯のように急げと告げる友千鳥、鳴が共寝をしている沢水は、名発句といえるだろ
う。

【西行の事跡】

新古今集の三の夕の歌枕(である鳴立沢)をお慕いになる和歌所と名高い飛鳥井雅章
も、駕籠に乗ってお越しになった。折しも春であったので「あはれさは 秋ならねども
しられけり」と詠じた歌が鳴立沢の証歌となったため、私(三千風)も行脚する松に笠を
かけた西行の弟子のようになろう。月(西行)以外に、鳴立沢をたずねる歌人は嵐が寄せ
る高砂子のように繰り返し尋ねて歌をかき鳴らしては、この鳴立沢に庵主を願う。

【文人の間で整備を望まれる鳴立沢】

幸にもその名高雄の文覚が鉦づくりした御影を納める円位(西行)堂、和歌三神や虎心
堂、なお五智尊を開基した宗雪居士の墓所、私(三千風)もここに永眠して、(鳴辰沢の
伝承を)謡につくり、或いはまた田鳥集に諸国の詩歌連俳をあつめつつ、西行上人の五
百年忌の供養が満願したうえで、伊勢市砂子の友人からは、施入があつて心強い。

【俳諧道場として整えた三千風】

情趣を解さない我(三千風)が身が西へゆく道導として立てた石碑

東往居士 三千風 元禄十三年辰二月望日にこれをしるす。 【石碑について】

このほか、西行、飛鳥井雅章、松平乗邑、その他数点を見た後、出立。前川で休憩。酒匂川
橋を渡り、4時に小田原駅古清水伊平に宿をとる。ここから、子供と高山君の人々に信書を
贈る。

(※長歌の概要は、講師の講義時点での解釈を一例として示すものです。
あまり、捉われることなく鑑賞していただけますようお願いいたします。)

参考文献 代表的なもの

- ・大淀三千風「明和4年(1767)4月 鳴立沢記」『大磯町史2 資料編 近世(2)』大磯町 平成11年3月
- ・三宅政之「神奈川県大磯明細全図」明治27年(1894)(大磯町郷土資料館編 平成29年 複製)
- ・關水華「大磯鳴立庵の俳跡」神奈川県教育委員会事務局社会教育課
(『史跡名勝天然記念物調査報告書 第十六輯』昭和25年3月)
- ・大磯町教育委員会『大磯町文化財調査報告書29集 石造物調査報告書(2)～鳴立庵～』昭和63年
- ・『収蔵文書目録第36集 小室家文書目録』埼玉県立文書館 平成9年
- ・久保田淳訳注『新古今和歌集 上』角川書店 平成19年
- ・『鳴立庵』大磯町郷土資料館 令和元年
- ・『埼玉県史料叢書24 小室家文書 三 五代小室元長日記』埼玉県 令和4年
- ・(藤枝市 HP 令和5年8月18日 閲覧
<https://www.city.fujieda.shizuoka.jp/kyodomuse/11/12/1445916539053.html>)